

## 7 ガレノスとヴェサリウスの解剖学の

## 比較研究 (四) —— 皮静脈を例にとつて

坂 井 建 雄

順天堂大学医学部

血管の解剖学は、ガレノスとヴェサリウスにおいて特に重要な意味を持つ。ガレノスの生理学説では、静脈と動脈と神経が異なる液ないし精気を全身に運ぶとされており、血管の全身での走行と分布は、ガレノス説の要となる最重要の解剖所見である。ヴェサリウスの『解剖学図譜』(一五三八)は三枚の門脈、全身の静脈、全身の動脈の図と、三枚の骨格人の図を含んでおり、血管の解剖学はヴェサリウスにとって最も自信のあるテーマであった。『ファブリカ』(一五四三)では、第三巻で血管を扱っている。

ガレノスの血管の解剖学は、『静脈と動脈の解剖について』および『解剖手技』(第三巻、アラビア語で伝存する第一三巻)、『身体諸部分の有用性』(各巻の臓器こ

とに、また第一六巻)に含まれている。これらガレノスの著作には英語訳があり (Goss 1961; Singer 1959; Duckworth 1962; May 1968)、『静脈と動脈の解剖について』を坂井・池田・澤井が日本語訳を行っている。ヴェサリウスの『解剖学図譜』と『ファブリカ』第三巻も英語訳がある (Singer & Rabin 1946; Richardson & Carman 2002)。ヴェサリウスはガレノスの『解剖手技』の第一三巻は見えていないが、残りの著作については熟知していた。

ガレノスは、上肢に血液を送る大きな静脈が二本あるとする。腋窩を通るもの(腋窩く上腕静脈)と肩から出てくるオミアイア(橈側皮静脈)である。この他に上腕静脈から分かれて前腕の皮下を通って手首に達するもの(尺側皮静脈)がある。前腕の皮下には三本の皮静脈があるとす。橈側皮静脈と尺側皮静脈にあたるものと、第三のものが前腕の中央にあり、これは肘窩の前面で腋窩静脈の枝と橈側皮静脈の枝が合流して生じ、上肢の皮下にある最も太いものであるという。

ヴェサリウスの『解剖学図譜』の第二図は、このガ

レノスの記述をほぼ忠実に図解している。上腕には太い二本の静脈 *Humeraria* = *Cephalica*、*Axillaris* = *Basilica* が描かれ、前腕には両者の延長の二本に加えて、両者からの枝を受ける一本が描かれている。皮静脈と深静脈の区別はされておらず、前腕の橈骨静脈と尺骨静脈は描かれていない。

『ファブリカ』第三巻の第八章では、自らの解剖所見をもとにこの記述が全面的に訂正され、全身の静脈の図でも皮静脈と深静脈が区別して描かれている。上腕には二本の太い静脈があるが、橈側皮静脈は上腕静脈と合流する枝を出さない。腋窩へ上腕静脈は二つの幹に分かれ、一つは動脈と伴行して肘窩に達し（上腕静脈）、もう一つは皮下に出て二枝に分かれ（尺側皮静脈）、橈側皮静脈と合流したり手首にまで下ったりする。ガレノスの記述は誤りだと指摘している。

ガレノスは、下肢の大きな静脈として大腿静脈を挙げる。大腿の上部で分かれたもの（大伏在静脈）は大腿の皮下に分布して膝に達し、膝窩の上方で分かれた三本のうち、二本は皮下を通過して内果と外果に向かい

（大・小伏在静脈）、一本は膝窩から腓脛を通る（膝窩へ後脛骨動脈）。ヴェサリウスの図は大伏在静脈を、大腿から内果まで続くものとして描いている。

ガレノスは足首に四本の静脈があると記している。外果（小伏在静脈）、足背の小指側（前脛骨静脈）、内果（大伏在静脈）、踵（後脛骨静脈）のあたりにある。ヴェサリウスは『ファブリカ』第三巻の第一〇章で、足首の四本の静脈を俗説として紹介する。内果のものは *saphena, matricis, vaginalis*、外果のものは *sciatica*、母趾へのは *poplitea*、小趾へのは *renalis* とよばれ、疾患の種類に応じて瀉血をする部位であるという。ヴェサリウスはこの俗説が根拠のないものだと論じ、間接的にガレノスを批判している。